

賞賛の教育的価値についての一考察

A study on the educational value of praise

1K06A256

指導教員 主査 友添秀則先生

横井真

副査 杉山千鶴先生

【本研究の動機】

私がこの研究を行おうと思ったそもそもの原因は、今も続けているラグビーである。私は高校時代からラグビーを始めたのだが、当時のラグビー部の監督は県内でも恐れられるほど厳格で怖い人であり、褒めることよりも怒ることの方が圧倒的に多かった。しかし、当時は恐怖の塊のようなもので怖いとしか思っていなかったが、現在では感謝の気持ちの割合の方が大きい。というのも、あの厳しい指導のおかげで高校3年生では県代表に選抜され国体でも活躍でき、多くのことを学べたと思っているからである。毎年監督の下から数名の県代表が選抜されており、そういった人たちだけに限らず、この感謝の気持ちを持っているのはその監督の指導を受けた選手の大半は同じことを思っている。

確かにスポーツ教育だけに限らずあらゆる教育分野において、否定的フィードバックを子どもに与えるより肯定的フィードバックを与えた方が成績の向上率が高いという研究結果はいくつも出されている。しかし、当時監督が私たちに対して、怒ることよりも褒めることの方が多かったら、はたして私は県選抜になりえたのだろうか、さらには今でも監督に感謝の気持ちを抱けているだろうか、そういった気持ちを周りのみんなは持てているだろうか。おそらく今とは違う結果になっていると思うのである。

また将来社会に出て上の役職に就いたときに、どのようにして部下を育てることが有意義なのかを考えたときも、この研究は私にとって非常にプラスになるとも思ったからである。こうい

った理由により、過去の研究では賞賛することは良いとされているが、はたして本当に良いものなのかどうかということに疑問を持ったために今回の研究を行うこととした。

【研究の目的】

賞賛への批判的な立場から、教育場面における賞賛の問題点を明らかにし、賞賛の教育における使用について検討すること。

【研究の方法と課題】

本研究は先行研究を対象に分析し、考察を加える文献研究である。本研究では、まず第1章に現実において、教育はアカウンタビリティ・システムという褒賞主義の立場に立っていることを見る一方で、教育における目的は何なのか、という根本的な問題を皮切りに、その答えである「自立の支援」をこの研究の主軸となる考え方に置くことを第1章の前半で論じていく。また後半では、一般的に認識されている賞賛の正の効果、意欲、方向づけ、人間関係、有能感といった4つの精神面にプラスに働くこと紹介する。次に第2章では、第1章の後半で述べた賞賛の正の効果について、否定的な立場から再検討し、各節で賞賛がもたらす意欲、方向づけ、人間関係、有能感についての問題を考察していく。また一方では、褒めること自体が人に悪影響を及ぼすのか、それとも褒めすぎることが悪影響を及ぼすのかについても考察していく。最後に第3章では、第2章の結論からどのように褒めればよいのかといった教育における賞賛の

使い方や注意点を考察していく。さらに、この考察と教育関連の参考文献をもとに、賞賛を適切に使用した授業を提案する。